

□防災まちづくり大賞 10 年を振り返って

東北芸術工科大学大学院

教授 高野 公 男

私はいくつかの建築や都市、環境計画関連のコンクールの選定委員を務めているが、私にとって一番印象深いのはやはり防災まちづくり大賞の選定委員会である。10年も続いているという理由もあるが、毎回、新しい視点の防災まちづくりの活動事例に遭遇して、私自身が大変勉強になっているからだ。もう一つの理由は、委員の人たちの大半は私にとってかつて防災問題にいっしょに取り組んだ旧知の仲間、いわゆる戦友たちであるということだ。はじめから個人的な話題になって恐縮だが、委員の吉村秀實氏は昭和40年代、まだNHKの駆け出しの放送記者だった頃からの知己だ。

大洋デパート火災をはじめ何回も現地取材のおつきあいをした。吉村氏からはテーマに取り組むガッツさを学んだ。室崎益輝氏は京大の堀内三郎先生の助手の頃から、中林一樹氏も東京都立大の中野尊正先生の助手の頃からの建築・都市計画の研究者仲間だ。いい師匠を持ってうらやましいと思っていた。野村欽氏は松寿園火災の時からのご縁で、それ以来、機会あるごとに福祉の考え方を教えて頂いている。そして、重川希志依氏は(財)都市防災研究所の頃からの仕

事仲間だ。当時、若くて可愛い研究員だと思っていたが、今はベテランの女性防災研究者だ。わかりやすい解説で市民に人気がある。選定委員会以降知り合った先生方もおられる。委員の人たちは、それぞれの分野の防災研究の草分けというべき専門家で、私にとっては時代を共有し、防災体験を共にする畏敬する戦友たちなのだ。分野の違い、取り組み、テーマの違いはあるものの、皆さん魅力的で意気軒昂、常に新しいテーマにチャレンジしておられる。選定委員会では、こうした委員の人たちの経験や見識に触れ、防災にかける情熱のシャワーを浴びることができる。それで、毎年、この委員会が開催されるのを楽しみにしているのだ。

*

選定委員には5つの仕事がある。第一の仕事は大賞の理念の確認や募集方針の策定だ。毎年7月頃に第1回目の委員会が開催され、その年の募集方針について委員の人たちと語り合う。その方針に基づいて応募要領が作られ、全国の都道府県や自治体、関係団体に報知される。大賞選定の理念は地域に根ざした優れた防災活動を掘り起こすことにある。募集方針は、毎年微調整はある

ものの基本理念や基本方針は10年経っても変わってはいない。このことはすごいことだと思う。

第二の仕事は応募事例の選定作業である。選定委員にとってはこれが一番面白く、同時にまた悩ましい仕事だ。11～12月頃に事務局が整理した応募プロジェクトの分厚い資料が宅配便で送られてくる。毎年5～60件はあるのだろうか。応募事例には、こんなテーマややり方があったのかと思わせるユニークな活動、組織的な広がりのある迫力のある活動、地道だが長く続いている活動…など実に様々である。同じテーマでも地域によって取り組みの仕方が異なる。実にバラエティに富んでいるのだ。選定委員はこの応募事例の中から一人10件、1、2、3…の順位をつけて選ぶのだ。選定基準はあってないようなものである。宝探しをするように、とにかく心の琴線に触れる事例に候補として付箋を付け、簡単なコメントをつけておく。見落とししたところはないかどうか、時間をかけて3～4回目は目を通す。甲乙つけがたい事例が多く、順位をつけるという作業が悩ましい。気持ちの整理が付いたところでエイヤと独断と偏見を持って順位をつけて事務局に送り返す。

第三の仕事は、委員会による大賞の選定である。これが委員会のメインイベントである。事務局が準備した各委員の採点を集計した資料を基に審議するのだが、自分が推した事例が入っていればひとまず安心する。上位に推薦したものが下位にあったり選外にあったりすると何故だろうと思う。

自分のセンスや見識、価値観が試される場面なのだ。異論があると推薦の理由が、各

委員から述べられる。選定委員も各分野のエキスパートなので、なるほどと納得できる場合も少なくない。委員の見識と鑑識眼がぶつかり合い、選定という場で委員自身がお互いに共同学習をしているのだ。そして、大臣賞、長官賞、理事長賞などの賞が決まっていく。

第四の仕事は受賞団体への現地訪問だ。

この現地インタビューが選定委員にとって、一番楽しい仕事となる。防災まちづくりは何よりも地域に根ざした活動である。

したがって、活動には書類審査ではわからない内実がある。フィールドを自分の目で確かめ、現地の空気を肌で感じなければ真実は捉えられない。どんなところなのか、行く前からその風景遭遇への期待感が高まる。防災まちづくりはリーダーとなる人や活動を支えている人々の志やセンス、パワーに依拠している。これらの人々に直接会って、苦労話などを聞くことも楽しい。

実は、この現地訪問が選定委員にとって最もインパクトを受け、勉強になる仕事になるのだ。そして、インタビューの感想をまとめ、コメントを作成する。いつも感じることだが、専門家としてアドバイスすることよりも、現地の人々から教わることの方が多いのだ。現地訪問が実施されたのは第5回からと記憶するが、私が担当させて頂いたのは7つの団体であった。

*

ここでは、その現地インタビューでの雑感を記しておきたい。

「なぎさニュータウン防災会」(第5回:地域ぐるみの防災対策二東京都江戸川区)で印象に残ったのは、団地住民の人たちが

防災活動を実に楽しそうにやっていたことであった。通常、2,000人以上が居住するような巨大な高層団地では、人口の流動が激しく、住民のまとまりも悪く、したがって自治活動が停滞しがちだと言われている。しかし、驚いたことには、この分譲団地では全くその逆で、定着率も良く、自治活動やサークル活動、住民相互の交流も盛んであった。都市の砂漠とも言われる現代の大都市の中で一種のユートピアを創りだしていたのだ。私は都市計画や住宅地計画を専門としているので、その秘密を自分なりに紐解いてみようと思った。この団地では、「はじめに防災ありき」ではなく、居住地の魅力づくりの文脈の中で防災が位置づけられている。人のつながりが強く、仲のよいまちは、住み心地がよい町である。

みんなでここに住み続けたいと思う気持ちだが、自主的な環境の保全活動や防災活動を進めるエネルギーとなっているように思えた。自治活動が盛んなのは、住宅の規模もそこそこで、集会所、広場などのコミュニティ施設が充実しているからでもあろう。

郷土愛を育む自慢の花見の場所もあった。

また、自治会が駐車場を経営し、環境整備や自治活動を進める上での自主財源が豊であることもその理由の一つとして見逃せない。人々が集まって住む場所の環境設計のあり方や暮らし方、社会的仕組みのあり方を改めて学んだ思いがした。「仲のよい都市」は東京復興計画を指揮した都市計画の先達、石川栄耀の提唱した理念であるが、その理念を体現している数少ない町ではないかと思った。

神戸の「御蔵通の復興まちづくり」(第7

回)では、コミュニティの復興とはこういうものなのかという、いいお手本を見る思いがした。ここでも集会施設が大きな役割を演じていた。集まる場所は平時においても災害時においても人々の心を結ぶコミュニティの核(シンボル)となる。復興時には、人々は心のつながりを一層強く求めるのであろう。その核となる場所を住民自らが創りだしていたのである。地域の篤志家が提供したビルの一階の小さな集会スペースは、サロン風のオシャレの場、学習の場として使われていた。各地から参加したボランティアの学生たちがサポートしていた。新しい手作りの集会所の建設計画もまとまったようだった。みんな元気を取り戻して、幸せそうに見えた。ここには「祈りの場所」があった。整備された小公園に震災で亡くなった人たちへの鎮魂碑が建てられていた。まち全体にポエジーを感じずる雰囲気が漂い、暮らす場所、生業の場所が蘇っている印象を受けた。知恵や汗を出しあいながら新しいコミュニティが創られていく過程が、心豊かで、災害にも強い地域社会を創り出す礎となっていくのだと思う。「ものづくり」と「ひとづくり」、「ことづくり」のバランスが良くとれた、心に残る風景であった。

岩手県田老町(第6回:津波防災のまちづくり)で印象に残ったのは、三陸海岸の波の激しさと津波防波堤の巨大さであった。現地を訪れたのは冬の風の強い日だったので、その印象を一層強く感じたからなのかも知れない。普段の海の姿を見ただけでも津波襲来の恐ろしさを感じ取れる。もう一つ印象に残ったのは、海に迫る集落背後の山の麓の墓地だった。海難事故や津波で亡くな

った人々の供養塔の林立する風景が印象的だった。この海を見下ろす「祈りの場所」で、自然災害に対峙する緊張感や海を生業の場とする住民の住む覚悟を垣間見る思いがした。過去の災害の記憶も様々なメディアで伝承されていた。津波対策は最近更に高い関心を呼んでいるが、田老町の人々は災害の教訓を忘れてはいない。現代の技術を活用し、防災の諸課題に対応しつつ、海を生かすまちづくりに取り組んでいって欲しいと願う。

津波防災に関連すれば、静岡県「人形劇プロジェクト・稲むらの火」(第10回)のグループの活動も素晴らしかった。津波の実態を知らない市民や子どもたちに津波の怖さをどう伝えるかがテーマとなっている。防災のメッセージは言葉や知識情報だけでは心の奥に響かない。紙芝居や読本でも限界がある。そこで舞台芸術でもある人形劇の可能性に取り組んだ。人形浄瑠璃のように人間と人形が一体となって演ずる人形劇は、一種の身体性の表現でもあり、そのパフォーマンスは見るものに独特のインパクトを与える。

人形、人形使い、舞台装置、照明、音響効果、シナリオなどを創意工夫、試行錯誤を重ねて一つの作品に仕立てあげた。印象的だったのは、「稲むらの火」のストーリーを改変したことだった。この新しい「稲むらの火」には、原作(小泉八雲)にはなかったシロという犬が出てくる。津波にあった主人を助けに行き帰ってこないというシナリオだ。このシロの登場でこの人形芝居は子どもたちにアピールしたという。虚構ではあるが身体に感じ、心に訴える作品になったのだ。

芸術性とエンターテインメント性、そして防災の規範性をどう統合するかが苦心した点だという。このグループから学んだことは、防災アートというジャンルがあるのではないかということだ。そうしてみると、身の回りにはいろいろある。火の見櫓、消防士の服装、消防車、消防署のデザイン、非常口のサインなども防災アートだ。慰霊碑もそうだし夜回りの拍子木やサイレンもアートではないか。「防災アート」を今後の研究テーマの一つとして取り上げてみるのも良いと思う。

*

現地インタビューを担当しなかった事例からも学ぶことが多い。表彰式の後に受賞団体の交流会があるが、これが五番目の仕事で、これも楽しい仕事だ。紙面が尽きたので紹介できないのが残念だが、共通して言えることは、いずれもリーダーたちの志や組織の理念がしっかりとし、住民の支持を得ていること。かけ声だけでなく、活動のディテールがしっかりしていること。肩肘を張った悲壮感は感じられず、活動を楽しみながら日常化していることなどである。防災まちづくりの「かたち」は実に多様である。阪神大震災を契機として発足したこの防災まちづくり大賞は10年経つが、掘り起こすべき活動はまだ無尽蔵にあるようだ。防災まちづくり大賞の意義と役割はまだ終わっていないのである。